蓑笠漁隱譯解遺卅

海居士 依田百川 批評

曲亭雜記

第二輯上編

松軒隱士 沼美玄幹 編輯

9145 Ta 629 ho

曲亭雜記卷二上編

目錄

㊀眞葛の老女
㊁一足雜の文
㊂かん〳〵のう唱歌の詞並に評　再評再評附
㊃軟奇兎園會の戯文

国立国会図書館
29. 7. 22

337590

曲亭雜記卷二上編

蓑笠漁隱瀧澤　解　遺草
學海居士依田百川批評
松軒隱士　渥美正幹編輯

○眞葛の老女

眞葛ハ才女なり。江戸の人。工藤氏。名を綾子といふ。性歌をよみ和文をよくし。瀧本様の手迹さへ拙からず。父ハ仙臺の俗醫士工藤本姓源氏平助諱ハ平。母ハ菅原氏とぞ聞えし。先祖ハ別所黨にて。播磨の野口の城主長井四郎左衛門より出たり。長井の族を加古右京といふ。幷に太閤その子孫零落して攝津の大坂にをり。傳天正七年三木合戰の條に見えたり。

數世の後長井大庵に至れり。是則眞葛の祖。平助の父なり。大庵ハ醫をもて

業としたりしかば。江戸に到りて紀州公に仕へまつりぬ。男子三人まで有けるに。只武藝をのみ學はせて。子ありとだに聞えあげざりしかば。ある時公ちかく侍らして。汝が齡既に四十にあまりたらんに。子ども両三人ありと聞ぬ。なとて家督を願ひ申さぬぞと問せ給ひしかば。大庵あさぼかり額つく程に。はふり落ん涙せし涙を拭ひて答へ申やう。いとありがたきまで忝き御意を蒙り奉りし事。身にあまりて覺候へども。かねて申あげし如く先祖は一城の主で候ひしに。たつきの爲にかく長袖になりたるだに口をしく候ものを。子どもをすら親の如くよし候はんは。先祖へめいぼくなく思ひ候へば。不肖ながら某一代のみ召仕はせ玉へかし。子どもはよしや浪々の飢に臨み候とも。武士にせまほしくこそ候へと

まう志かば。公感じ思食て。さらば方伎は大庵一代たるべしと仰出されて。跡をば武士にふされたり。これよりその長男は長井四郎左衛門と名のりぬ。澁川流の柔術とりて。師の允可を得されども。生涯事にあはざりければ。名を志らるゝよしもなかりき。次を長井善助といひけり。はやさし箭の射手にていさゝか世に知られたり。この同胞は紀州に仕へ奉りぬ。平助は三男なるをもてさのみはとて。仙臺侯の醫士工藤某に贅して。そが養嗣にぞ志たりける。されば亦平助も實父の志をうけ嗣て。圓頂長袖の身たらんことを羞しかば。侯に願ひ奉りて俗體にて有けれども。衛生の術にはおろかならず。思ひを蘭學にひそめて。發明する所も多かりしにぞ。その名も粗聞えたりける。かくて平助が子ども數人あり。

長女ハ綾子所謂眞葛是なり。次を工藤太郎といひて才子なりと聞えしよ。父よ先だちて身まかりぬ。その次ハ女子。又其次も女子也。これらもよすがもとめて後幾程もなく世を早う去たりこそ。その次を工藤源四郎 元輔こそいひしわ和漢の才子にて詩を能し歌をさへよみけるよ。方伎も亦庸ならず惜らくハ短命にして子のなかりしかば。今ハわづかに名跡のみ遺れりといふ。その次ハ女子にて名を栲といひけり。こハ越前北姫うへに年來みやつかへまつりしよ。姫上なくなり玉ひしかば。北丘尼になりて瑞祥院と法號せり。今なほ鐵砲洲の邸内にあるべし。又その次も女子なりしを。ある醫師に妻せられしが。こも亦もやく身まかりしこそ。その同胞七たり。才も貌もとり〳〵なりけるそが中に。乙の子の

こやけの御まへに給事にとてまゐれるとき。兄の元輔が後のおとりなしましめて。よく勤よかしふた親のめぐみをおもふに。雨露の如くひとしきをうけたる身の心々にたがへるを。かの七種てふ花のかハれるに似たりとて。

おのが志ぐさにほふ秋野の七くさも露のめぐみハかわらざりけり。とよみてさらせさりしを。後に綾子の傳聞て。よくもいさめたるものかな。さらばその七草の花にたぐへんに。藤ばかまハかぐはしといへば太郎よ。その次なる女かほよけれハ朝顔その次ハなみなべし。をはなをそにこそをハさめ。越の御まへなるハ萩。乙子ハなでしこにふるべし。葛ばなハめづるばかりのものゝなれども。葉のひろければはらからをさしおほふ。子の上にも似つかハしかるべくやと定めたりしより。物にハ綾

子を眞葛と唱へ。栲ハ萩と唱へ。祝髮ゝ後ハ萩の尼とも志るゝたり。かゝるめでたき同胞なりゝよ。五人ハ命長からで。文化の末よハ眞葛と萩ゝ尼瑞祥院のみぞのこりたりけゝ。そが中よ眞葛ハいとをさなかりゝころより異なる志ありけり。明和壬辰の大火の頃。物の價のよハかよ騰りて。賤ゝきものハいよゝ窮すること傳聞てひとりつらゝ思ふやふ。いかなれば商人の心ばかり鬼々ゝきものよハある。あハれ民の父母たる身よゝあらば。かゝ淺まゝきこゝハあらせじを。悔ゝくも女よ生れたることよゝて歎きたり。これよりの後。ゝれハ必女の本よなるべしと思ひおこしつゝ。とよかくよ身をつゝしゝ。已をうやゝくしうすることハさらなり。女子ハおもよこそ肝要なれゝて。愛敬つきたらんやうよもしつ。又漢文を讀まゝほりせしよ

父いたゝく禁めて。女子の博士ぶりたらんハゝろし。草紙のみ見よゝいれしかば。源氏物語伊勢物語などを常よ枕の友ゝしつゝ。年十六の時はじめて和文といふものを一ひらばかり綴りゝりしよ。父の平助これを村田春海よ見せしかば。いたゝめでよろこびて。その師なゝてかゝまでよ綴れるハ才女なりゝいひしゝぞ。みづからハ只伊勢物語を師ゝして綴りてけるよ。畧られしゝこのけやけきよ恥て。これゝちハ親よすら見せゝりしかど猶ゝくせんゝおもひゝり。手跡ハ叔父なりける人瀧本様の能書なりければゝれ手を學びて大かたハ極めゝれども。五十ちかきゝころ右の腕の痛む疾おこりしより。物かゝゝもわかき時よハ劣り。目もかすむゝ常よなりければ。細書の草紙ハ得よまずゝいへり。いづれもゝ女の本よ

ならんとほりせしよ。日々のわざまして何事まれ人のうへよ就て。心のゆく所を考果さはやとおもふ心もつきよけり。かくて第元輔よ四書の講釋こゝふことをせさせて只一ことたび聞くことを得たり。これより孔子聖人の教ハ。すべてかゝるすぢよこそと。聊このもしく思ひとり。佛のをしへもよくハ知らねど。念ずれハ必利益ありと思ひとりて。年來觀音と不動を信じ奉りけり。是より先よ年十六七なりし頃。仙臺侯の御まへよみやつかへよのぼせられし折。みやつかへハ獨勤なりと思ふこそよけれ。ふたりの同役ありさても。勤ることはヨれ一人なりさおもはゞ。うしろやすかりてんと覺期せしかば。傍輩よも憎れず。人の怠を咎る心もふかくして。果して後やすかりしといへり。又をさふかりしころ。奴婢の秘事をするが。

ものゝいひざまと氣色とよ志らるるをうち見て。あなおろかよも立ふるまふもなかな。人よ志らせしと思ふことを。なかく〳〵よ人知れかしといハぬばかりなるハいかよぞや。かく淺はかなる心もて志のび遲ふものどもの後々までいかでか遂ん。懲よまよふものの心ばかり。おろかなるハなかりきさおもふ程よ。果してその事顯れて。追れしものゝありしとぞ。かくて給事の身のいとまを賜りて宿所よまかりし比。母のなくなりしかば。猶をさなかりし妹どものうしろ見をもしつ内を治ることをさへうち任するものゝなかりしよより。三十をなかば過るまで人妻とも得ならでありしよ。同胞のうちいづれまれ國勝手なる人の妻とせば。元輔が爲よろしかるべしと。父の年來いひつれども。われ仙臺へ赴かんといふものハふかりしを眞葛

ハ父の仰ハもれ待らし。ともかくもはからせ玉へといひしまゝ。父よろこびてあち
こちゝ所縁もとめつゝ。當時勤番ハて江戸番頭なりし、只野伊賀とて祿千石
を領する人の後妻ハえハし定まりしかば。仙臺河内元支倉とて。仙城の二の
丸ハ程ちかき。只野氏の屋敷へ遣嫁ぜられけり。人或ハこれを諫めしもの〻あり
しハ。眞葛答ていはく。遠く仙臺へよめらせんと欲するハこれ父のこゝろなり。又遠
くゆくことをうれハしく思ふハ子の心なり。ふでう子の心をこゝろとして親の情
願ハ背くべき。われハ三十六歳を一期として死したりと思へば。憂もなく怨もあ
らず。死してすゝぎせわろくハ必地獄の呵責を受べく。且親同胞ハあふハよしなか
るべし仙臺ハもとも厭しき所なり。且聲だみてむくつけき男ハかしづき。詞かゞ

きもなき宿を生涯うち守るらんも。地獄の呵責ハますことなかるんやといひし
とぞ。さて年ありて父平助も身まかり眞葛の良人伊賀も世を去りて。前妻の
嫡子只野圖書の世となりにゝり。この家いとかたくなる家則多くして。傍い
たき事のみなれども。繼母のことなれば何事も得いハず。いとおろかなるわざかな
と思ひつゝそがまゝ〳〵せずといふことなしはじめ女の本ハならんと思ひしを
得果さず。なのこ同胞の世を早くせしことのかなしくて。よしやヒが身女なりと
も。人ハ異なる書を著して世ハも知られ乃祖の名をも顯さばやと思ふハ。今の
諸侯の多くハ財主の爲ハ苦められながら嬖妾ハ費を厭ひ玉ハず。或ハ職位を望
みてそがなかだちするものハ謀られ。あたら黄金を失ひ玉へることなどをはじめと

して。經濟の可否を論ずること數篇。全書三卷を獨考と名づけたり。時は文化十四年冬十二月朔。眞葛五十五歳の著述とぞ聞えし。此他奥州はなし一卷。磯づゝひ一卷あり。予がこゝは忘るしつけたるハ、眞葛の子が爲は書ておこせし。昔がたり。こハずかたり。秋の七くさ。筆のはこび。などいふ草紙の意をうけて。畧記しつるものゝ。

予ハ近き頃まで眞葛を忘らず。文政二年己卯の春きさらぎ下旬。家の内のものどもの。年の始のことぼきはて。親族許ゆきたりし日。齡五十ばかりふる比丘尼の。徒者ひとりいたるが來ておとなふ有けり。とりつぐものゝなき折なれど。うちもおかれずみづから出て。何處より來ませしぞと問ふは。比丘尼のいはく。尼ハ

牛込神樂坂ゝる。田中長益といふ醫師は由緣あるものは侍り。主人は見參せまはしと。いひつゝはじり上りたり。予ハ文化のそじめより。客を謝し帷を垂て。常は人と交らず。をちこちの騷客の。多は來訪せらるゝも。舊識の紹介なければ。病は托して逢ざりしは。ついでわろしと思へども。せんかゝのふきまゝはいな。主人ハ出て今朝よりあらず。家の内の人とも。いつちへかゆきたりけん。已ハ忘ぼし留守するもの也。何事まれ仰おかれよ。歸らば傳へまゐらせんと。惟光がほは答へたり。その時比丘尼ハ懷より一通の封狀と。さかな代と忘るしゝるこかれ一封と。ふくさは匂みたる草紙三まきをとう出て。こハみちのくの親しきものより。あるしまゐらせよとておこしゝる也。草紙ハをんなの書たるをこゝの翁の筆削を

たのみ侍るとよ。猶つぶさにハ此消息にこそあらめ。尼ハ今宵田中許に宿し侍れば。翌のかへさに又ことぶらひ侍りてん。その折に一筆なりとも。此かへしを賜ハれと。傳へ玉へかしといふ。予答てそハこゝろ得て侍れども。主人ハ年來筆ごる技に倦つかれたればとて。いづ方よりよさし玉ふも。かゝるものハうけ引侍らず。殊さら留守の宿なるに。あづかりおかは叱られやせん。又折もこそあるべきに。こハもてかへらせ玉へかしと。いなむを比丘尼ハ聽すして。そハ宣ふことながらおん身の心ひとつもて。おしかへされんことにハあらじ。とまれかくまれ預りてたべ。翌の朝ハ己の比に。またこそ來めと期をおして いとまごひしてまか出にけり。予も亦書齋に退きて。まづその狀をひらきて見るに。いひおこしたる趣ハ 比丘尼のいへるに同じけれ

ども。ふみの書ざま尊大にて。馬琴様ぶりのこの眞葛ごのこゝありて。宿所なぞハ定かに忘らせず。不審しきこと限りもなければ。獨つら〳〵思ふやう。此年來貴人より。書を賜ハりし事のあれども。かくまでに尊大なるハいかふる人の妻やらん 仙臺侯の側室にて。御部屋など唱るもの歟。遙々とよさしぬる。草紙ハ何を書たるやらんと。思へハやがて繙きて見れば經濟の可否を論じて。獨考と名づけたる。ふみまきの稿本也。その說ごものよきところハこまれかくまれ。婦人にハ多く得がたき見識あり。只惜むべきことハ。眞の道を忘らざりける。不學不問の心を師として。論じつけたるものなれば。傍いたきこと多かり。はじめより玉工の手を經て。飽まで磨れなばかの連城の價にも。おとらぬまでになりぬべき。その玉をしも玉鉾の

みちのくは埋みぬることよと思へば今さらは捨がたきこゝろあり さハさりながら人妻か母かも忘らぬ一老婆の その宿所だに定かならねば 需は應ずべくもあらず。いでやゝが志を見忘らして その後はともかくも せんすべあれと思ふまゝん その夜かへりをものするは 已ハいとはやくより市は隱れて 婦幼童のもてあそびものとなるよしハ 刀自なも忘られたるなるべし。さばれこたみ よせられしおん作の冊子ハ それらのすぢまハあらぬを 世の人のゝれを忘れるものと 異なる見どころあるまあらずば 江戸まハ名たる儒者も 國學者も多かるを 已まハたのみ玉ハし。さるこゝろもてせられなば なゞていと尊大なる 大凡人まもの問ふまハ禮節あり いまゝへの人ハ 一字の師をだも 猶おろかまハ せざりき もゝまことは問ん

このみこゝろあらばかくハあらじを 馬琴ごだまたゝへられしハいかまぞや 曲亭も馬琴も子が戯號なれど 戯作狂詩狂歌などのうへまのみ交る友ならば 忘か唱へられんは咎むべきことまハあらず もゝ實學正文のうへをもて 交る友まなほ曲亭ごたゝへられ馬琴ごいるゝハ 是ゝれを忘らざるものは似たり いかでか予が心は恥ることなからんや かゝれば刀自もよく予を知り玉へるまあらざるなめり 近頃平賀源内が 儒學蘭學のうへまハ鳩溪ご號し 戯作まハ風來山人ご稱し 淨瑠璃本の作あるまハ福内鬼外ご志るしたり 又太田覃ハ儒學は南畝ご號し 狂詩は寢惚先生ご稱し 狂文狂歌は四方赤良 四方山人 巴人亭 杏花園ふごも志るし 晩年まハ蜀山人ご號しだれごも 戯作淨瑠璃のうへならでハ 鳩溪を

風來とも鬼外とも稱するものなく。狂文狂詩狂歌のうへならで。南畝を寐惚と
も四方とも巴人亭とも。稱するものハあらざつき。よゝやその著きをのこ呼なれ
て。虛實の號を混ずるとも。眞よよくその人を知れるものハ。こゝらは心を用ふべき
事歟。刀自ハよく子を忘らず。子ハ素より刀自を忘らず。男女みづから授受ざる
ハ禮也。刀自ハ人の妻か母歟。その宿所だもつゝみ玉ふ。われ答る所を忘らず。
こゝをもて只わが志を述て。おどろかし奉るのこゝ書忘るゝつ。かくて妻のをんな
を呼びて。翌の朝忘かゝの北丘尼來つべし。主人ハけふも未明ゝ出てあら
ず。こゝきのふのおほんかへし也と告てゝたせよといふゝ。おゝろ得て忘かはからひ
つ。忘の後二十日ばかりを經て。又かの北丘尼より御宰めきたる使をもて。陸

奥よりの消息を屆け侍るゝておゝしたるゝ。栲の尼と忘るしたる添ふこもあり
けり。まづ眞葛の狀をうちひらき見るに。おたみハいゝおゝしくだりて。文の書ざ
まのねもごろなりしそが中ゝ。よろづまあハゝくしきをんなの。よそをだに得忘ら
ねば。今ハやもめゝて。いゝおゝすげたる身ゝしあれゞ。をゝこゝ物いはんゝ。ねもこ
ろぶをたらんも。なかゝくに無禮ふるべしゝ思ひゝりしより。禮なしゝ見られゝ
けん。露ばかりもそなた樣をあなどる心あらば。人にも見せぬ筆のすゝびを。たの
み奉るゝことやハある。この後ゝても心づきなき事多からんを。教られんゝこゝそれが
ひ侍れ。こなたのうへを忘らせよゝあるゝ。いかでつゝこゝ侍るべき。眞葛ハ忘かゝ
なり。又ゝきゝわらハが消息をもてゝふらひ侍りしハ。妹にて忘かゝ。その身

のうへをも。妹袴の尾の名どころをも。つぶさに書忘るして。別に昔かたりといふ草紙一巻に。その先祖のことさへ。忘るしつけてみせられたり。又その消息に。こゝにハ詞がさきもなく侍れば。只あげくれに物を考かんかへするおこの。癖となり病ひともふり侍りたり。さて思ふやう。何の爲に生出つらん。女一人の心として。世界の人の苦を助まほしく思ふハ。なしがたきことゝ忘りながら。只おの事を思ふが故に。日夜やすき心もなくて。苦しむぞ無益なる。今ハやもめにもなりつるに。なげきをのこさん子とてもなし。息のかよハん限りハ。この歎きやむおこあたハし。長く生てくるしまんより。息をとゞむるぞ苦をやすむるのすみやかなるべしと思ひて。ひたすら死んことを願ひ侍りしに。時ハ秋のことなりき。曉がたの夢に

秋の夜のながきをめしを引く蔦の。といふ歌の上のおのづからふと聞えたるハ。多年信じたる觀音菩薩化ぢめさせ玉ふと。覺て夢ごころに奉なく。此下のつけやうにて。おのが一世の占ならんことまで。忘めさせ玉ふとおぼえて。いとうれしく心あハたゞしきものから。世々に榮んとこそいはめと思ふ程に。さめはて侍りき。四の句いと大事ぞと思ひつゝ。やゝ程ありて。

たへぬかつらハとつけ侍りし。

秋の夜のながきためしにひく蔦のたへぬかつらハ世〳〵にさかえん。と一首のかゝちをなしぬれど。いと心もとなくのみ思ひ侍りき。かくたえず物をのみ思ひ積り故にやとて。病者となり侍りて。身もよわく心もきへ〳〵にのみふり増り

しが。不動尊を信じ奉りて後。漸病もうすくなり侍りしかども。今は右の手のいたみて。筆取こと心のまゝならず。眼くらくして。細書を見ることあたハず。是ハ老の病ひとぞ覺え侍る。この近き日たつを。岩不動と申奉るがたゝせ玉ふ。年毎の五月廿八日ハこのわたりなる幼童どもの集合て。御輿をかき荷ひ御旗あまた持て。遊ぶが如くもて渡り侍り。我も赤色なる御旗をたてまつりしを。御先ハ持てわたりしかば。御心ハつかせ玉へるならめと。有がたく思ひ侍りしを。宵過でうすねふさきを。いざ寢ばやと思ひて端居しながら。籠ハこめたる螢の。やすげなくふるまふをまもりつゝ。何心もふくてあつをしほどを。

ひかりある身こそくるしき思ひなれ。といふことの耳ハきかれて。めさむるこゝ

ちせしハ。此御佛の御志めしぞと有がたくて。

世にあらハれん時をまつ間ハ。と又下をつけそへ侍りし。此二歌をちからを。さらば心をこめし事どもを。書志るさばやと思ひ立て。いとおほけなきことどもを。いひ出せるをぞ侍るなる。書果て後ハ誰ハ志らげをたのまばやと。ひさしう思ひ煩らひて侍りしを。かゝる人ハ見せよと不動尊の御志めしありし故、そなたまことよせ侍りしにこそ。おろそかならず。考を添玉ハらんふんとねんゞ奉りぬ。今の此身ハ譬ば小蛇の物ハ包れて。死もやらず生もせず。むふしき思ひのこれるをひとし。君雨とふり風とふりて。こゝろぜしを引たすけ玉ハらば。もし天に顯るゝことのありもや せんなどありて。こたみハ瀧澤解大人先生様御もとへ綾

子と書れたり。この長文を見る程は。おもはず涙はをふり落て。あはれむ心はなりはたり。名を諱ことはから國の制度なるを。國學などのうへまでは。ふかくいむよしもあらず。たゞへ今はなべて忌ごとても。戯號を唱らるゝはをるかはまして本意は稱へり。但大人先生などたゞえられしのみ。當りがたき事なれば。大人先生のはけを忘るして。かたくゞめたりけれども。猶あやまくは用ひざりけり。こは羹は懲りしものゝ齏を吹くたゞひならまし。そもゝこの眞葛の刀自は。男子たましひあるものから。をさなきよりの癇症の。疑り固りしはもやあらん。さはれ心ざま素直はて。人わろからぬ性ふらずば。子がいひつることゞもを。速は諾ひて遠祖の事をさへ。忘るして見することやはせん。かゝる婦人のたのめる事を。猶いなまんはさ

すがはて。忘かゝとこうけ忘つる。その折の子がかへしに。海なす御心の廣からずば。木の枝は鼻をすらるゝといひけん如き。子が言ゞさを諾ひ容れて。忘かゝこは聞え玉はど。およそはこゝみの御消息にて。あし曳の山の井社影さへみゆるこゝちして待れば。淺くは思ひ侍られど。不動尊の示現によりてなど。聞え玉ふばかりうけられれ。そはさまれかくもあれ。たのまれ侍りし一條は。よくもいろくもなし果て。おん笑ひはこそ備ふべけれ。忘かれども生業の爲はたのまれたる書ものゝ多かれば。今年の暮まで待せたまへゝと忘るして果て。妹の尾の添ふみを見るは。陸奥よりの消息ゞけ奉る。さてもいぬる日ふたゝひまでとふらひまつるしは。人づてはなせそ。みづからゆきて忘かゝと傳へよかしゞ。みちのくよりいひおこ

したりーまこそ。さるを次のあーたにもあハせ玉ハぬまて志り待りぬ。かの留守ぬの翁こそ。ふろまくけれ。かゝれば奥のたより毎ま。尼がその消息をもてゆきて。こゞけまゐらするも要なー。此後ハいつも使をもてすべきに。禮なーとてな咎めたまひそと。あんじたるふみの書ざまなれば。予ハ何ともそのことのいらへハせで。

ふみわきてこハれー草のいほりにハなほ春ふかからゞろ君かも。こよみてつかハせーかば。後のたよりまかへし。

やぶーもかぬ君か心ーそるならばわがこゝろもかれずやあらまー。こゝありーに又予がかへー

ことくさを花こー見れば こゞめあへずきのふおーみしはるハものかも。とよみて

萩の尼

つかハーけり。こハ卯月朔日のことなを有げる。この萩の尼瑞祥院も。多く得がたき才女まて。歌をよみ和文をよゞー。走り書うるハーこて。手ずちゞ蛾の眞葛ま似て。瀧本様なるもめでたー程經て予がことくさの歌をたゞえて。

ことの葉のちげきいほりの下つまやふるえの萩をもなこなすらん。こよみておこーたりき。又ゝの年の冬。萩の尼より物をつゝみておこゝー服紗をあやまちて炎桶の中まこり落ーこりけるを。わびつゝかへーつかハすこて。

こがれつゝまこしかねたる川舟花かせのふこさまは いこゞくるしきこいびーまは。

解

萩の尼のかへし。

よゝ人のたゞひまあらずまめなりやげふ草の戸まかへすこまハこゞありし。こハ

子が遣したる。かへの服紗をかへせし折のことになん。是より先に彌生のころ、真葛のせうそこよ。御生業の爲よ筆とらせ玉ふまていとまなきよ。志ば〳〵わづらはし奉るを。こゝろふしとやおもはれ侍りてん。などありしにかへしすゝて。よみてつかはしける

わが宿のはふさゝこころもみちのくゝ風のたよりはいとはゞりけり。ほど經て真葛のかへし。

あやまらず君よつげなんかへる雁かすみかくれよゝつて〳〵ふゝ。こはその家のおきてあれば。予よ消息をおくれる事を。誰々よも忘らせずとか。嬉よ聞たることもあれば。歌の心も忘られたり。是より後かれて書つゞけたりし物なば。妹の尼よ浄書せしめ。又予が爲よ綴れるものをば。真葛のみづから浄書して。くさ〳〵しくおくりて見やられゝり。おの餘その消息のもしよも。真淵春海宣長大平などを論せ〳〵あり。いとけやけくおもほゆるを。さのみはとて忘るゝもつゝさず。かゝるゝ程よこの年もはや霜月よなり〳〵かば。獨考のことは忘れ玉はずや。かねての約束をたがへたもふなゝど。いひおこせることゝ志ば〳〵なれども。今さらよそのふみを引なほさん事易からず。もゝそのよろきを刈さらば。殘らんことの葉すくなかるべゝ。こはこのまゝにうちおきて。別よ論すよますことあらじと。思ひよければ原本は。假名つかひのたがへると。真名の寫〳〵あやまれるよ。いさゝか雌黄を施〳〵て。別よ獨考論二巻を綴りたり。その言露はかりも諂ひかざれる筆をもてせず。そ

の是非をあげつらふま。教訓を旨として。高慢の鼻をひしぎしまを。いとおとなげなきまさまに似されど。かくいはでかさほめせば。いよ〳〵ささるまふくて。まふーといふとも予が斧を。うけたる甲斐はあらざるべし。人まに信をもてするまに怒を怕れて諫めざらんハ。交遊の義まあらずと。かねておもふまよりて也。かくて廿日ばかりまして。その書やうやく成りしかば。みちのくへつかハすとき。いつ〳〵までもまじらひ申こと。うけたまハり度思ひ侍れど。をとこをとなの交りハ。かーらの雪を冬の花と見あやまちつゝ人もや咎めん。且ゝが生業のいとまふきまに。年來思ふよしもあれば。いとふるきなどずら疎くなり侍りたり。かゝれば君ん交りも。是を限りとおぼし召れよなとこいひつかハせしまを。炎の年の春みちのくより社かへしと

て。萩の尼の屆けられたり。くだんの尼ハ予が論の書ざまを。識れりと見てうらみまけん。怒ハ筆まあらハれまき。こハ姉まおとりてむねせまき。婦女子の氣質と志られたり。眞葛ハさもあらずして。いといたくよろこびうけたる。消息のまめやかまて。おんいとまふき冬の日まに。書肆ともの せめ奉る。春のまうけ社ゝどをすらよそにして。かうなが〳〵しきことを綴りて。教へ導きまハせし。御おろ社程あらハれて。限りもなき幸ひまいそ侍れ。おほ氷き世まに此めぐみをかへし奉るべしと書れるま。このごろ越前の御くまかゝどて。賣物まハ絶てふき。小形の美の紙十五帖ど。同〳〵國のはさみ。陸奥名ごり川なるうもれ木の葉もとあらの萩の筆などを贈られしまを。明の春 きさらぎの頃。そのよろこびを一筆書てつかハ

せ〜ま。か〜このかへしハ來またれど。久米路の橋のなか絶て。ふみ見ることハなくなりぬ。いとかな〜ともかなしかり〜が。かく遠ざかりぬる事を。いかにぞやと思ふ人の爲まハ。いふも要なきまどさながら。彼同胞ハ才女なり。齡ハかれも小動の。五十を過る程なりとも。迭まおもてをあらずして。親しく年をかさねなば。李の下まハ冠を正し。瓜の園まハ屨をいる〜。人の疑ひなからずやハ。且彼家の主にハ志らさで。みそかますといハるゝを。知りつゝ交るべくもあらず。いと捨がたき思ひありて捨ずしてかなハぬハ過世ありての事ふらんと。かねてより思ひしなり。これまりの後まとろまぬ。曉毎まハ思ひ出て。そのあけの朝消息さへ。とまを出しつゝ見る毎まハ。涙ハ胸まハみちしほの。ふかきなげきさなりまたり。この後三ヒさせばかりの程ハ。

337590

萩の尼が御宰をもて。予が家の奇應丸を。求めさせつる事折〳〵ありしこゝむすめどものいひつるまて。扨ハ予が安否の程をみちのくへ告んとての。わざかゞ思ふもいとはかなし。いかでわれ眞葛の草子を刻本まして。世まあらハさんと思へども。彼獨考ハ禁忌まハ觸ることゝ多かり。まして予が獨考論などハ。人まハ見すべきものにハあらず。されば此二書ハそゞろまな人まハ貸そと。興繼をすらいましめたり。又奥州はなしなどいふものも。憚るべきことゝまじりたれば。刻本まハなしがたし。只磯つたひの一書のみ。その文の殊にすぐれて且めづらかなる說もあり。禁忌まハ觸ることゝのなければ。是をこそさおもふ物から いまだ時の至らぬまや。書肆ゞ謀るハとまなかりき。眞葛の齡を縷るまハ。予に四つばかりの姉なりければ。今

もなほ恙なくば、六十あまり三ッまやならまし。眞葛は文政七年某の月日に身まかりしとぞ。今茲三月尾張の友人田鶴丸が、松島見にゆきしをりことつけしに、眞葛とうとからぬ仙臺の醫師にさつねしよしまて、はつかにその訃聞にたる也。丙戌四月追記　おもふまゝ

ぬる文化のはじめつかた、尾藩の某氏の後室が、新瀉といふ草紙物語を書つめて予が筆削を乞ひけるも、かたく辭ひて還しさり。又近き頃本郷なる田中氏の女の、予が教を受んと願ふこと、既に十年に餘りぬと聞えしも、いなみて終ようけ引ざりき。まいて男子の予がをしへ子たらんと請ひし人々ハ、かゞなふまじなきを、意見を述推禁めて、いづれも、需に應ぜざりけり。予が人の師ごゝろざるハ、柳宗元に倣ふあらねど、素より思ふよしあれば也。さるを只この眞葛の刀自のゝ、婦女子にいとよげなき經濟のうへを論ぜ〜ハ、紫女清氏にも立まさ

りて、男たましひあるのみならず、世の人ハえぞ忘らぬ。予をよく忘れるもあやしからずや。されば予が陽に袵けて陰に愛ハるこのゆゑのみ、かう世に稀なる刀自なるを、兎園社友に忘らせんとて、いとゝいひがたきことをすら、おしもつゝまで忘るすまなん。秋もてやけふのみと暮ゆく窓の片あかり、風さへいとゞ身に忘みて、火ともす程をまつまゝに、かくなん思ひつゝけける。

うらみきと思ふもひとしし眞葛葉に今もふごりのあきの夕風

予ハ例のふみ屋らに迫められて、かゝるものがたりいとまなきを、そのいとまなき折にいと長〜〜忘う書んこそ、まことに書まほしあるべけれど、思ふも老の忘はみゝるなら瘤を見するに似て、われながらいと〜〜をかし。されば、きのふ已のころ

まはじめて筆を把りしより。さて書くことかく程ま。夜もはや二更の鐘を聞つ。このはたひらを綴り果まき。もちろ初藁のまゝましあれば。さすかま心もとなさま。今朝をじめより讀かへして。纔ま誤脫を補ふものから。拙きうへまなほ拙きが。巧ましてけふれまこゐの。間まあハぬまハますらめど。みづからゆるすも嗚呼なるべし。文政八年乙酉冬十月朔藉

百川云。眞葛の父工藤平助とゆへるハ。世ま名高き奇士林子平が從弟なりとか聞しことあり。さればこそこの眞葛の老女も丈夫氣あるならめ。余獨老といふ書を一讀するま。當時藩主が商人等の爲ま國財を管理せられて。己が自由ま民政を行ふ事を得ざるを痛こたる論あり。又婦人の爲に政事

なゝ紊らるゝ事など舉て論ぜし處もありき。又金銀寶貨の說など。經濟の才ありといひつべし。曲亭ハ博學なれども。經濟の才ま至りてハ。眞葛ま及ばざる處もあらん。されば多くの人と交りたれども。實ま感服せしもの少なきに。獨この老女を推稱して。口に容れざる如きをもて見れば。世ま珍らしき婦人ふるべし。此傳と先ま載せられる蒲生の傳と。男女一雙の敘事の奇文なるかな。世ま傑士賢婦少なきまあらねども。奇文をもて傳ふるもの稀なり。かの二人の奇節をもて。曲亭の奇文を得てこれを忘るす。實に古今の一大奇觀ごすべし。

○一足雞の文

文化十一年の夏の比、飼鳥あきなふもの、雞の雛の一足なるをもて來て、これを買ひたまはずやといれしかば、引よしてよく見るに、實に一足ふることこそ寔に一足なるものから、その足らざる左の足は、皮肉の間にありておぼしく、運動に忘たかふて、腹の皮うごもちたり。これ恆弱不具にして、眞の一足なるものからず。よりて鳥屋に示して曰く、汝惠子の言を聞ずや、雞に有る三足といへり。語は莊子に見えたる也。蓋彼の惠子がこころ、雞は三足なれども、その足を使ふものの内に亦ひとつあり。故に有る三足といひき。もしその理をもていはゞ、三足も尚足らず。宜しくもつて四足となすべし。いかにとなれば、凡手足の運動は、魄其用をなす毎に、心まづ魂に傳へ、魂速に魄に指揮して、その進止を自由にす。されに

よりて推すときは、雞の二足なるも、これを使ふもの内にも亦ふたつなければ、足比用をなしがたし。かゝれば四足といふこそよけれ。惠子が言の如くならば、足を動かす魄のみありて、是を指揮する魂なきもの也。もしかくの如くならば、進退その度を失ふて、そのゆくところを知らざること、風に輾べる歌に同じ。これに似たるは狂人のみ、狂人の進退は神識衛を失ふ故に、その動靜夢寐と異ならず。かくの如くなるものは、二足にして三足也。その魂位を失ふ故のゑ、この餘はすべて四足とすべし。吾三足の說をすら、排斥すること既に久し、汝はこの鳥をもて、一足なりといふめれど、されば則四足とす。夔をすら一足といふ謬說は、風俗通に辨じたり。豈一足の鳥あらんや。ゆきゝと追ひづれば、鳥あき人嘆じて曰

こなべての鳥ハ二足なり。只この鳥のみ一足なるよ。君ハ惠子の語を引て。三足といひ四足とす。目が一足といふよしハ。目よ視るまゝをいへるなり。君が四足といふよしハ形をさらで理を推も社歟。その理の隱れて見えざること。なほこの鳥の一足社皮肉よこもりて出ぬが如し。細人ハ理よ疎かり。欲するものハ只利のみ君がいハゆるあし多かるも。これその足を取よしなければ。魄のこありて魂なきごとこ。還らば妻子よ虚走といれん。足乎足乎。これ又赴くこころありいとま申すといひかけて。籠を挑げてまか出よけり。此あき人ハさるもの歟。野夫よも功者ありといハまゝ。乙酉九月朔草

百川云。此文ハ戯よ題を設て作りしものに似たり。然らざれハかゝる奇物ハよくその理を辨へて記するものなるべきに。只その空理のみよ趨りて。絶て事物の形容よりて。一足の奇を推考することなし。それ事物百變よして。窮りふしこれどその物あれば必すそのゆゑよし無きこと能ハず。よく物を見るものハ。徒らよ空理よ拘泥せずして。その實理を究むるを專とす。西洋究理説是なり。曲亭の才學をもて。何物か推考し得ざることあらん。然かるよ一偏の空理をもて此文を綴りしハ。寓言よして實よその物無きなるべし

○かんくのう踊唱歌の譯並評　再評再譯附

文政三年秋の比より葺屋町河岸見世物芝居よて興行せし。大坂こだり長崎龍おどりもん句　されをかんくおどりといふ。そのゆゑハ。たいみんのうどうる。ひしを。わらべらがきゝたがへて。かんくのうとうたひしによれり　たいみんのう引き

うのれんす。きうハきうれんす。きうハきうれん〳〵。さんちよならへさア引いイほう。
ヨイくわんさん。いんひいだい〳〵やんあアろ。めんこんふはうで。志んかんさん。も
へもんさハいゝ。ひいはう〳〵。

一文政三辰年春大坂阿彌陀之前荒木與次兵衛名題の芝居まて胞前國
長崎之者共罷越唐人踊有」之大當まて日々見物群集いたし候右之
歌唐音まて難二相分一和解之義大通辭神代四郎右衛門へ申付左之通

○かん〳〵のう（看々阿みよ〳〵）○きうのれんす（久阿戀思久敷戀思ゟ）きう
れんす（久久戀思久く戀ゐもふ）○きうハきうれんす（久阿久戀思同上）○さんちよ
ならへ（三叔阿他人を叔父分にて尊み稱する言葉なり。三男を三叔と申ハ。女より戀おもふ人をさして尊みし言葉なり。おらへハ久しくおもふなり）○さあいほ

う（財副藩方役人の事）○ヨイくヨんさん（二官樣申す餘ハ右に準ず二官の二を唐音ハル
ウと申ハへども所なまりにてハニイとも申ハ）○いんひいたい〳〵（戒指大々ゆびかね大分）○やんあろ（送）
（同おくる事○是ハ唐館内にての和語まて。指かねの事をいんひいと申ハ。大分の事をたい〳〵と申。たくることをやろうと申ハ。遊女の言葉也）○めんこんふはうて
（面孔不好的顔のよくない）○志んこんさん（心肝色黑きと云事○長崎にて船に通じたる遊女どもをシヤンスと申ハ。是ハ唐館の遊女どもをさんこんと申ハ。是ハ花もひ人とヤ意にて文字ハ心肝とヤハ。右ハ唐音をかりて申ハ。さんハ。やはり遊女などの誰さん彼さんとヤことにて。樣なり）○もへもんさハ
いゝ（男根大）○ひい（陰門）はう〳〵（好々）右男根をもへとヤハ。もへもんとハいゝ。唐音にても和語にてもなく。唐館の遊女の言葉
なり。トハイ、とヤハ唐福州の俗語にて。大なることをトハイ、とヤハ。唐館の俗言なり

右役者共唐人の心持まて名を左之通附
居申候

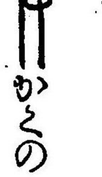
三官　四官　九官

男根をもへもんとゆ候ハもしやもえるとのことまて可」有」之哉御笑迄ま申上候　相思　志やんす唐音と相見えゆ候

朱書

右本文文字假名付ヶなどあやまりもあるべく思ハれ候へども先づ本の儘ま認置候○今按ま唐音まて分りがたくと候へとも。つくづく熟覧いたし候ま。元より唐音まてハなく候。かん〳〵のうとゆ事ミヨ〳〵の意まあたり候哉あたらずやハヨきまへ不」ゆ候へ共。看々と注釋候へば。看ハ元より和の字音まて。久戀是亦同じ和の字音なれば。此方の字音を唐音めかし。長崎の遊女屋などまてうたひ噪候ふしと存られ候。唐人共並ま長崎の遊女屋などの和語まてあるべく考られゆ候○他人をさして叔父と尊み稱するなどハ

おもしろく候。万葉集まこもりくのはつせを國ま夜もひせす吾脊のみことよなどあがめたる意ま叶ひ候。俗ま親かた親ぶんの意なり○ふらへハ久しくおもふ也とある。此ならへを久敷とゆなど。却て唐の俗語まてこれなきや○指かねをおくるとゆ事閨中の婬業の樣まゆ人も候へど。左樣まてハ此歌跡へつゞき不」ゆ候。思ふ人にハ指かねをおくるとゆ事ハ。左の意まハ候はずやと存ゆ候。玉勝間ま云さぬきの國人女をよばふま。藁をむすびておくるヨざあり。此事彼國まても城下などいふやうの所の人ハ志らぬを。なべての所の里人共ハ皆する也。



如」此結びておくるにいなと云返事に

かくの如くまして引ちがへてかへし。あハんといふかへりことま

かくの

如く結びめを中へ引よせてかへすなり。もし万葉ハ玉梓といへるハかゝる事ハあらじか。今の世ハ草の實の仁ハ玉づきといふがあり。件の藁の結びさまハ似たりと。かの國の山田六郎高村が許よりいひおこせたり。始め結びかた此通り

ふの説とハ事柄ハたがひ候へど。この歌まて指かねをおくり候を難なく受取たらば。戀の返事の叶ひるなるまハふゝやと存られ申候

すべての歌のこゝろ

見よ〳〵我久〳〵戀おもふ三叔よとあがめて。其戀おもふ人ハ蕃方役人の三男なり。その人を戀ふたふて指かねをたび〳〵おくり〳〵也。ふかるまその

男ハよき男まあらず。顔こまゝ色黒けれど。男根大きゝて陰門のかたまとりてハよろ〳〵き人なりまといふ意也

モエ〇もへヲもえること有説あたらず。前ハふんこんハ心肝こと釋シ。陰門をヒイなど云へば。いづれ字音或ハ唐音めきたるこなへ振の所。是のみモエルモユルなどの和訓のさまあたるべきいはれなし

シャンス是又唐音おぼつかなし。日向の國のうたまゝ〳〵がおふやんすま。手ねぐひどもやつたチウガどらんチウいろはかすりかけチウやるこたやつたチウカ物まならんチウいろ事ども忘てそこなつてヨカイヤカチウとやうた御座候。相思ふ事か。シャンスまハたゞ媚たる女をさ〳〵てシャンスと

男ハよき男まあらず。顔こまゝ色黒けれど。男根大きゝて陰門のかたまとりてハよろ〳〵き人なりまといふ意也

モエ〇もへヲもえること有説あたらず。前ハふんこんハ心肝こと釋シ。陰門をヒイなど云へば。いづれ字音或ハ唐音めきたるこなへ振の所。是のみモエルモユルなどの和訓のさまあたるべきいはれなし

シャンス是又唐音おぼつかなし。日向の國のうたまゝ〳〵がおふやんすま。手ねぐひどもやつたチウガどらんチウいろはかすりかけチウやるこたやつたチウカ物まならんチウいろ事ども忘てそこなつてヨカイヤカチウとやうた御座候。相思ふ事か。シャンスまハたゞ媚たる女をさ〳〵てシャンスと

聞えゆ候。旅のくづつめを。下さまの言葉まおしやれと云類なるべく候。此日向のうた虎の門内藤様藩中の人まも多く承り書留置ゆ候中まも此シャンスのうた御座候

此一冊昨夕外より到來一兩人藩中のものまも見せ今朝伺まも罷出候駕の中の退屈紛まも失立筆まて鼻紙へいろ〳〵書付考へゆ候。まゝ夫を朱まてのせ御一笑にそへさ〳〵上候

卯月廿九日

霞關大先生様

天神前（これハ麹町平河天神前といふ義にて明石侯の家老なりとぞ。質名未詳）

最初ハ茸屋町河岸まも出て龍踊を旨さ〳〵。うた踊りハつけ事なり〳〵まも。此うた

小童のおぼえやすきゆゑまも。町々うたひあるきける。文政四己年三月深川八幡まて成田不動開帳參詣群をなす。八幡鳥居前まてこの踊あり。不動參詣まもりもこれを見る人多〳〵。両國回向院境内まも出されどもあまりはやらず。ふき屋町まてはじめハ大明のうどうたひ〳〵が。うつかねの音まも混じて童どもかん〳〵のうどうたふことまなりぬ。

此大明のうどうゝひ〳〵まて。清朝の童謡まあらざるを〳〵る。長崎のものゝ聞ごりたるまゝ。連續せざる唱歌ふるべし〳〵

上元の夜。龍燈馬燈などいふものをつくりたる圖ハ。清俗紀聞まも出たり。元來ハ此龍燈のこゝろなるべ〳〵（これハ西原氏の考なり）

此踊りのかたを蠏き。うへまかん〳〵のう云云の歌をかきたる錦繪。文政四年の春の頃よりあまた賣出したり。又彼すりかねのもやうせ〳〵童のもてあそび物も處々までうれり。童どもこのすりかねを買ふてたゝき。大せい町々をうたひあるくこと甚〳〵かりき。これまより同〳〵歳の初冬の比。町年寄の沙汰こして町々の名主へ。童ども唐人踊といふ歌をうたはせぬ樣ませまほ〳〵きよし觸られしかば。いく程なくうたひやみたり。尤一奇事といふべし

彼かん〳〵踊の唱歌並まゝ〳〵き繪をあまたあつめて一巻こ〳〵一件の考をもそへられしは西原一輔老人の好事なるべし。はるかまに予まよせて見せられたり。無益の事ながら。後世好事のもの〳〵夜話まもぶりぬべしこと思ふまゝまうつしこめぬ

文政五年壬午十二月二日燈下錄

○かん〳〵踊の唱歌の譯文の評を觀て又戯まに再評ス

前評まは唐音まて分りかたとあれども〳〵こと熟覽するまは唐音まてはなし看々久戀こな和の字音なり云云

再評。看々（カン）〳〵久戀（キウレン）を唐音（たうおん）まあらず和の字音也といいれ〳〵は。唐音まくはしからぬ千慮（せんりよ）の一失（いつしつ）なるべ〳〵。看々久戀は和漢同音まて。唐山（からくに）まても看々ハカン〳〵久戀ハキウレンも也。その證（あかし）は兩國譯通（やうこくやくつう）まは見えて。看字の唐音ハカンツウ。久戀の唐音ハキウレンこあり。この他和漢同音の文字甚多し。その一二をいはゞ三點（サンテン）但見（タンケン）一面（イメン）。これらは水滸解（すいこかい）まは見

えー唐音也。又皮毛ピイモウ道人ドウシン夫人フウジン。これらハ両國譯通に出たる唐音也。この類甚多かり。枚擧ヨ遑あらず。他ハ準へて知るべー

他人をさして叔父といふ事万葉集ヨ云云

これらヨ万葉集を引れしハ。あまりヨ遠く求め過さるヨハあらずや。これハ今こゝ方の童どもの。他人をさしてをぢさんをばさんといふにおなじ。この俗語ハ彼土にも宋元の時よりありし事と見えて。水滸傳ヨ哥々和音カカ唐音コウ〻大哥和ダイカ唐タアコウなどあるハ。此方ヨて兄貴ふどいふにおなじ。みふ他人を尊稱する俗語なり。又夫の弟を叔々といへり。武太郎が妻武松をさして叔々といひしこと同書ヨ見えたり

叔父の唐音ハシエフウなれば。三叔ハサンシエふり。さるをさんちよといふハ。和音ヨもあらず唐音ヨもあらず。いたく訛るふるべー

指かれをおくるさゝ事玉勝間ヨ云云

評ヨ引れしきぬきの國の片ほとりなる男女の媚むすびハ。即こちのこの錦木ヨ似たる事なり。長崎の遊女が指かれの事もおれに似たりといふハよーなきヨあらねど。この指かれの事ハ。今清國の俗のをさくする事なるを傳聞て。長崎の遊女ヨもする事ふるべー。寛政十二年十二月十二日遠江ノ國袖志ノ浦去二掛川ニ里餘ニ漂泊せー。清の寧波府の船人劉然乙。その徒八十二人。かの地ヨ逗留中。徒然なるまゝヨ。夜毎ようたひー曲子を九連環九連環ヨ和漢同音なりといい

ふ。おの唱歌ハ思ふをこゝより九連環をおくられ〜よ。解ほごも〴〵解きがたゝ〜ごいふて。男女のあひがたきを喩へさり。九連環ハこの方よいふ智恵の輪なり。よりて思ふに清の國俗。男女相思ふさき智恵の輪を遺ることあり。この事を聞傳へて。長崎なる遊女の指かねといふ事ハ〻まれるなるべ〜

九連環の唱歌並ニ

譯文は義笠雨談に載せたればこゝにハはぶきつ

○譯文ハいんひいたい〜を戒指大々の事と譯〜。やんあろを送儞といふハゝ〜譯されーまよれば。和語の訛りまて。ゆびをいんひいと訛る。やろをやんあろと訛りー也。かゝ譯ーてハ文句いよ〜〜猥褻を聞ゆ いんひいたい〜を指かねの大なるものとしては。江戸まて

いふりんのわの類と聞ゆ。かくて下の句へかけて見れば。文句いよ〜〜猥褻なり。停止せられしもむべなるかな 今試ハいハゞ。いんひいたい〜ハ

一品奶々まて二官の本妻をいふ歟。やんあろハ相安樂の義歟。これハ女のかたよりを想像つゝれたむ詞なり。奶又奶ハ作る。奶々ハ類書纂要に俗稱貴人之妻曰奶奶一この方にておくさまといふにおなじ。奶々の唐音ハナイ〜〜なれども。かよハしてタイ〜〜ともいふべし 又その女かゝがゆくすゑの事に思ひとりて。わが身いつかの二官の奶々ハ如ゝ。夫婦安樂ハ相ゝらさんといふ事ゝ解〜ても聞ゆべし。

志かれどもこハ推當ハいふのみ。當るやあたらずや。博識さだめよ

一男根をもえもんといふ事。長崎の遊女の方言ならば。もえハもゆる義。もんハものゝ訛りまて。もゆるものゝいふこゝろなるべ〜。前のいんひいを指の事とし。やんあろを遣の事とすれば。もえもんの譯あゝらずとすべからず。唐山の俗語に陽物を光頭郎などいふに

一笑千笑 志かれどもこハいゝといふ事。福州の俗語まて大なる事をトハイイ

といふならば。もえも唐音にて俗語ならんといはれし評まことにかふべくおもはゆ。
但しいまだ證文を得ざれば熟か是を知らず

○ヒイハ陰門の事。ハウ〳〵ハ好々といふ事勿論なり。陰門をヒイといふまハ證文あり。毬好々々と書くべし。唐伯虎が僧尼孽海まこの毬の字見えたり。何の字書にもなき奇字なれば。音ハ定かならねども。皮の唐音ビイなれは毬も皮と同音なる事疑ひなし。同書に毬男根なり毬女陰なり又毛音ハ入歟詳ならず又毬音義未詳等の奇字あり。いづれも彼土の俗字ふるべし、字書まハ絶て見る事なし

右御秘藏の巻物御見せ被下候むくひまでまハ無益の辨ながら具に御笑候

御一覽後御夏虫被成可被下候

醉中興まに乗じて又いふ○相思の唐音スヤンスウなるまに。長崎の遊女が相思ふことをおやんすといふハ唐音を訛れる也。日向國の方言まおもふをなまを子をおやんすといふも。唐音の移れるか朝鮮語のうつりしならん。驛路の賤妓をおやれといふ。此おやれハ調戯の字音を訛りていふのこ。おやんすとおなじかるべからず。今江戸まても大猫の何となく物またハふるくなをおやれるといふ。ねこおやらし。おやれがかうして。などいふハみな調戯の義也。さて驛路の賤妓ハ。人のあそびたハむるゝものふれば。おおやれといふなるべし

○件の歌を譯文の趣まおだがへば

見よ〳〵わが久しく戀おもふ云云（これまでハ前評にいはれしごとしさんちよならへ。よいくわんさ）

三叔と二官を一人の事としてハ此うゑ聞えず。三叔ハ蕃方役人の三男をいふ。二官ハ二男あるべし。歌のこゝろそのをな子ハ三番めの息子を思ふゆゑにさんちよならへといふならへハ入しく思ふよしなり

さいほう　この段よりすべて二官の事をいふ。二男ハ三男に立まさりて金もちなりといふなり　いんひいたい〳〵やんあろ　さかも指かねのりんのわなど用るにも。大きなるを用ひらるゝであらふそのゆゑハ　めんこんぶそうて　面孔ハ好らねども　さんこんさんとおもひつゝ　もえもんこいハゝ　それをいかにとなれば男根巨大なればなり　ひいそう〳〵　男根巨大なるゆゑに。房中格別よからんと也。二男ハぶをとこ三男ハ美男とわけていへり

○又愚譯ハ志さがハゞ　前段ハみな相おなじ　三叔ハ美男なり。二官ハ醜郎なれども既に妻あれば。夫婦常ハ樂むであらふといふ心を。一品奶々相安樂といふ歟。叔その二官ハ醜郎なれとも。妻の爲ハ志んこんさんと。ふかくおもハゝ故ハ男根巨大也。ひいはう〳〵ハ前におなじ　といふふり。これ則三男を思ふまより。二官の既ハ妻あるを

羨みて自他を比喩せしものゝ聞ゆ。いづれハしても和語ハ唐音ハどうちまじりて唐音のかた多〳〵。志かれども皆訛れるなり

百川云。九連環ハ月琴の譜ハ見えたり。即ちその詞ハ。看々也賜奴的九連環九叶九連環雙手拿來解不開拿把刀兒割割不斷了也也吻とあるを當時き〳〵誤つて本文の如くハ唱へしなるべし。原詞の意を解すれば。奴ハ九連の環を賜ハり〳〵を。雙手をもて拿り來りて。解かんとすれども開かず。刀兒を拿りて割とも割ぬといへる義なり。情婦の情人ハ贈る詞なるべし。長崎の譯官ハ此等の詞を知らずやありけん。無稽の推量をもて字を充たるハ笑ふべし。その後これを非とゝして譯を下すものも又推量の說ハ過きず。曲亭の博

覽なるも、原文を見ざりければ。又さらに推量を加へて。その說益密にしてその譯ます〳〵謬れり。されによりて考ればこの文章などに力を極めて考證を述るも實に中れりや否らずや。いとも危きことなりかし

○耽奇兎園會の戲文

去年より吾が友たちの月毎にすなる。耽奇兎園の雨會を。京なる同好の友にしも聞え知らせたるかへしに。いとうよろこびて。そはいかなる風流ぞ。今もむかしも京浪速にさる遊をせしものはふし。あなめでる。手の舞足の蹈ところを忘らずさまでうらやまれたり。これにつき彼につきても。この事を思ひおこしゝる。松蘿館こそなつかしけれ。かしこの便りまだあらずやと。思ひつゝ寢れば秋の夜も。いとゝいとゝしき曉に。そのことをのみ忘のびかねて

天地乾こん度の耽奇おとに聞け　東陽　西原　潢南　北峰

されもまた例の癖ながら。ひとりうち笑まれつゝ。次の日海棠庵の二十六夜まちに招かれしに。いぬる日筑紫より便りありけり。かう〳〵となん告らるゝ。特に本意ある事なれば。又忘のひかれ口をしりて。それ忘かゝ〳〵と語り出るに。そをそがまゝに忘るしてたべ。柳川につかはしてん。とゝ〳〵と云はるゝに。恥かゞやかしう思ふものから辭みがたくて又かくなん

あそびふくる兎の園にかけし友はひさり筑紫にあり明の月

かくいふものを誰とかする。和漢雅俗のえせ博士。名は高きに似て身は卑く。腰は

かゞめど心ハ直く。貧しけれども足らざることなく。可愛がられず憎まれず。得意ハ貴賤の女ゟらんべ。敵手ハ世界の學者達。是士あらず農ならず。工ならず又商ならず。偷食の民ゟがまゝもの。乞ハずしてもらひ獲て諂ハず。人をそしらず。また譽もせず。氣位高き天竺浪人悴が宅ゟ居候。されども業ハ引さげて。藤ハ五文よりやすき。只三文の智恵の海。鹽のさし引味噌薪。仕送りかたを本屋ゟ任せ〳〵。胸三寸で五人口。筆一本で三十年。賣れたら〳〵いハ曲亭馬琴。養笠漁隱ゟ著作堂。玄同陳人。鸞齋老人。雷水散人。信天翁。閑齋。狂齋。愚山人。瀧澤篁民。名ハ解字ハ瑣吉といふ。將門眞田が影武者より。猶あまりある出たらめ名號。是で知れずば。ちよう事がなし　文政乙酉七月念七戲墨

百川云。曲亭が自傳ハ吾佛の記ゟ見ゆれば。その詳なるを知るべし。されどその記ハ。己が履歷を記すのミ。氣象性質ハ。自ら謙遜〳〵して載するゟ及ばず。ちかるゟ此戲文かくいふものハ誰ぞがするより以下。全くの自傳ゟして。その志尚性情を思ひのまゝゟ寫〳〵出せり。可愛がられず憎まれずの一句ハ。その人物を見るべく又それ識見をも見るべし。文章ハ流暢洒落ゟ至りてハ。一種輕妙の體。學ばんとするも學び得べからず

曲亭雜記卷二上編終

明治廿二年一月十八日印刷
仝　廿二年一月十九日出版

定價金十錢

編輯兼發行者　東京府平民　渥美正幹
東京四谷區四谷仲町三丁目十九番地

印刷者　幸田勝三
仝日本橋區本石町一丁目一番地

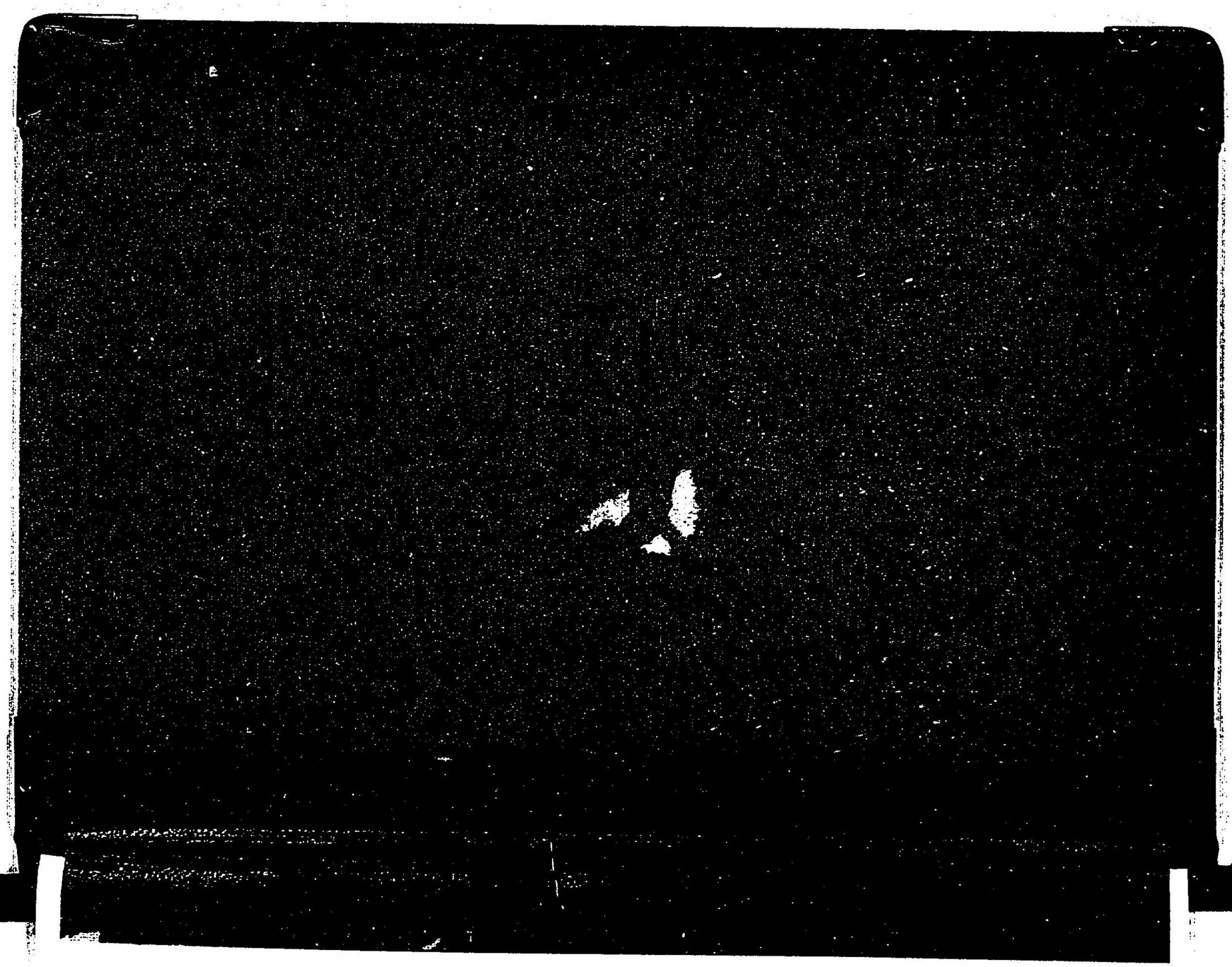
印刷所　常磐橋活版所
仝日本橋區本石町一丁目一番地

發賣所　吉川半七
仝京橋區南傳馬町一丁目十二番地

版權所有

（通信省認可）

昭和廿一年一月十八日



曲亭雑記

2輯 上

国立国会図書館

914.5
Ta624kz